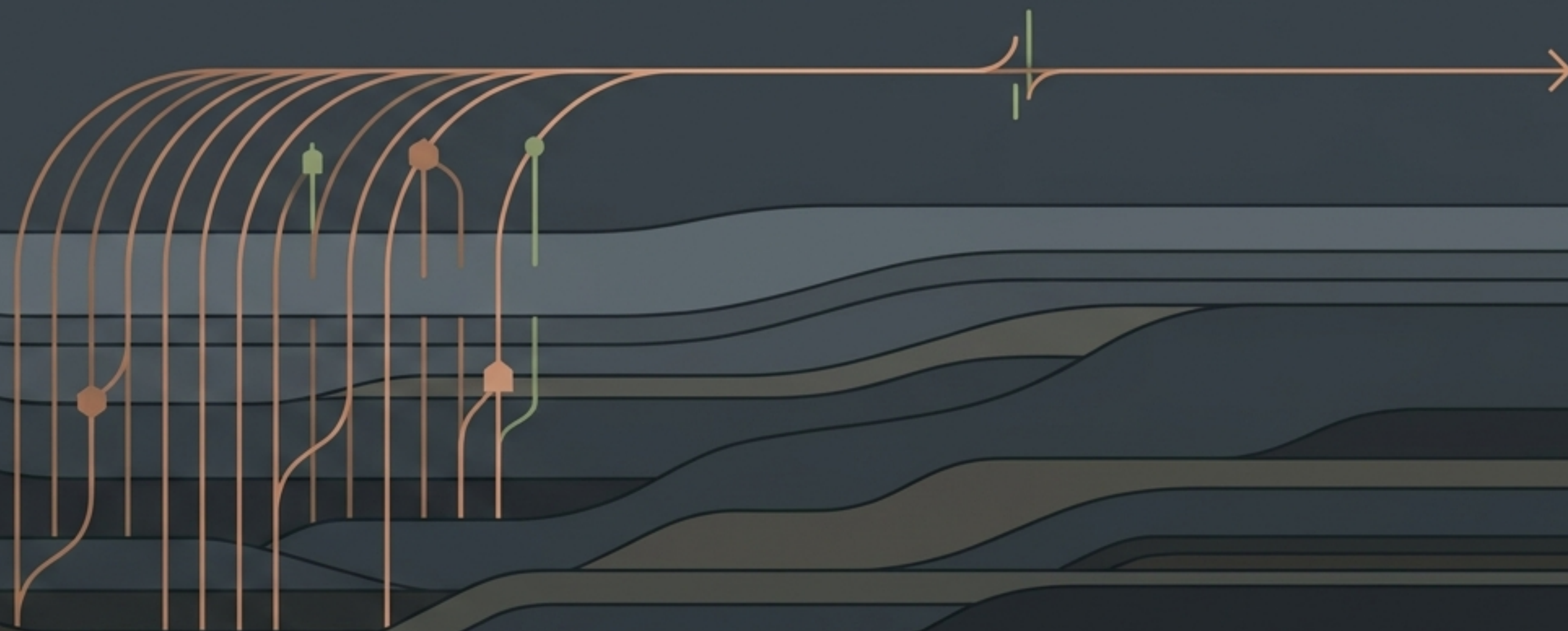


現場に埋もれた知を、会社の未来へつなぐ
GEMBA-OS™ Open Document



現場と経営の間に生じている「静かな分断」

属人化

見積もりを出せるのが社長一人

ベテラン不在で品質判断が停止

後継者が先代の基準を説明できない

システム摩擦

新システム導入で現場の入力だけ増加

AIに文書を読ませても実務で使えない

計画と現実のずれを誰かが黙って吸収

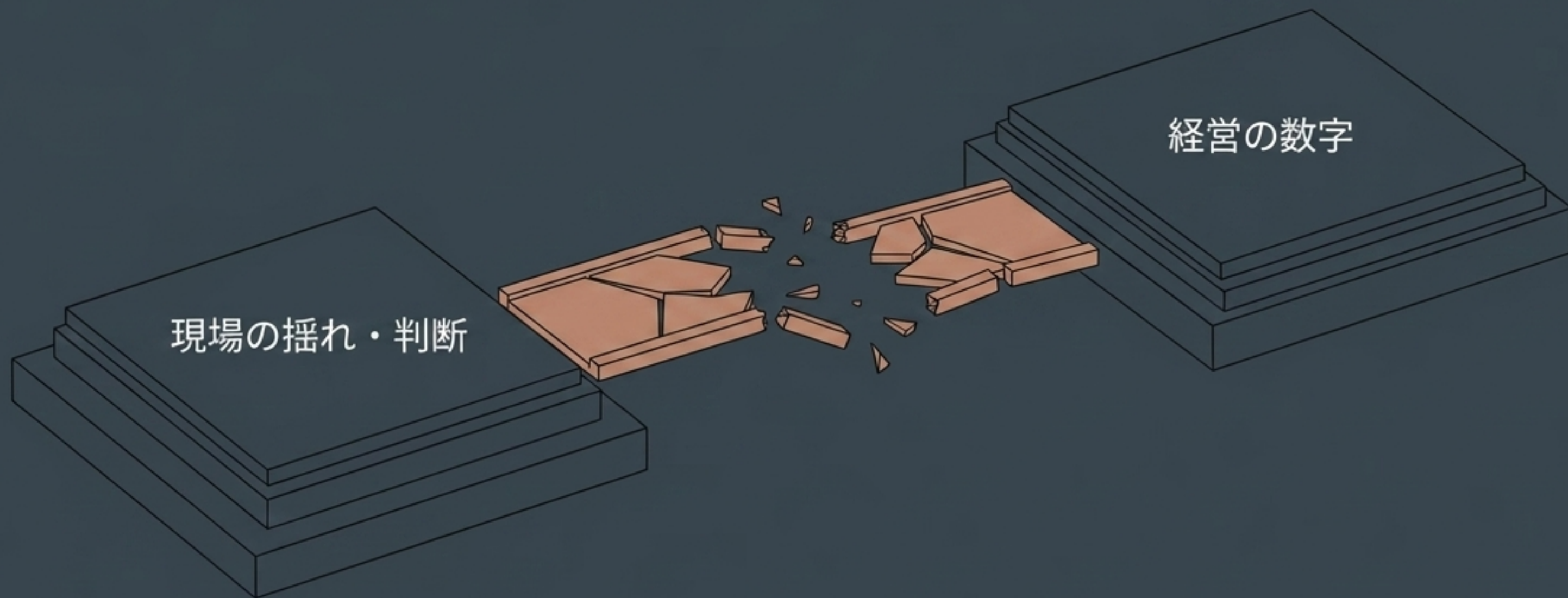
データの死蔵

売上増でも現金が減る理由が不明

現場の改善が利益にどう繋がったか見えない

過去の帳票・写真・図面が眠っている

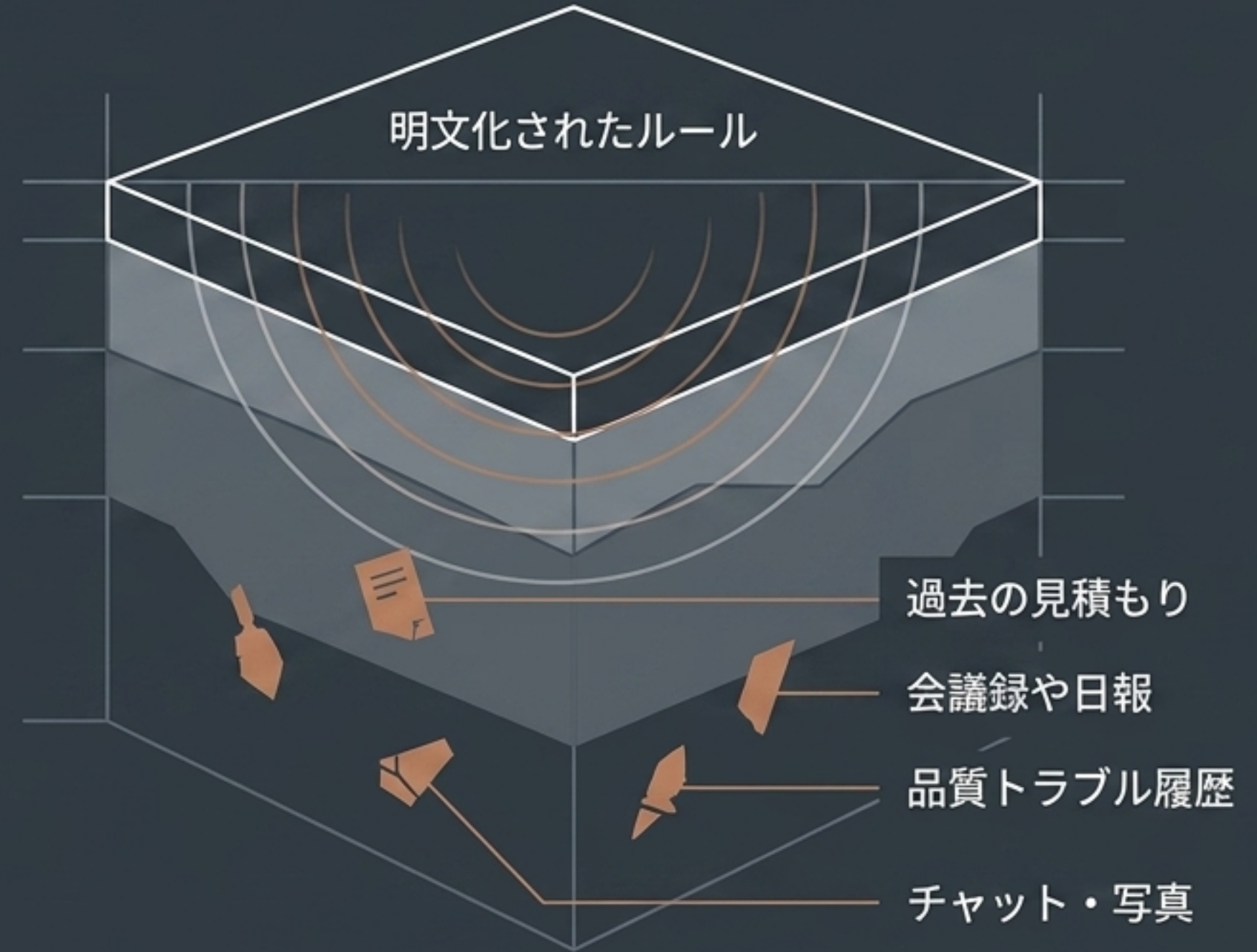
個別の問題ではなく、「翻訳」の欠如



これらは別々の問題に見えますが、根は一つです。会社が何を見て判断し、誰が現場の揺れを吸収し、それが経営の数字へどうつながっているのか。会社自身にも見えていないことが根本的な課題です。

痕跡から「会社の本当の意図」をすくい上げる

GEMBA-OS™は、文書をAIに読ませるだけの仕組みではありません。
会社ですでにある痕跡から、繰り返される判断や暗黙のルールを見つけ出し、会社全体で使い続けられる知的資産へ変える仕組みです。



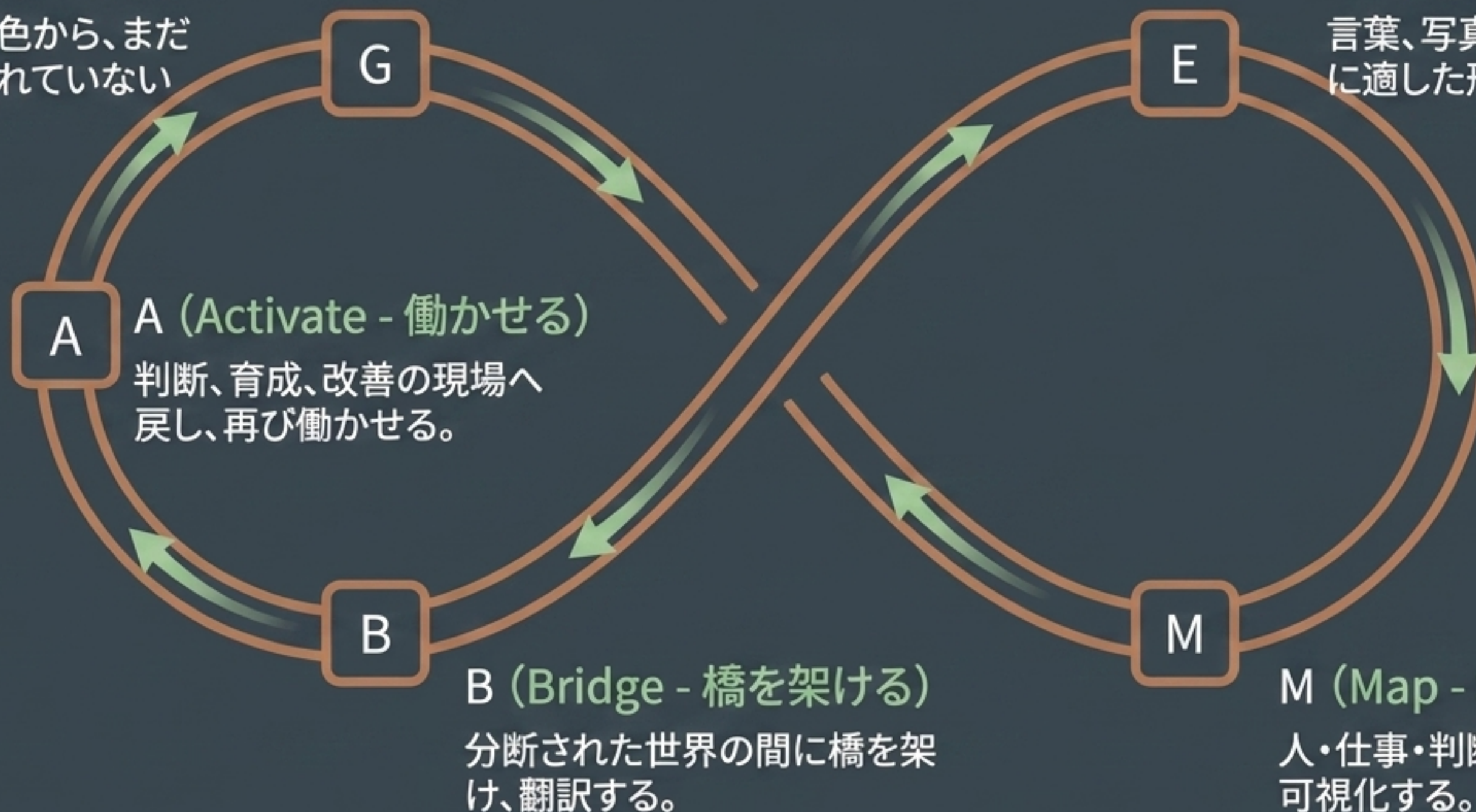
知識を循環させる5つの働き

G (Gather - 拾う)

当たり前の景色から、まだ知識と認識されていないものを拾う。

E (Externalize - 出す)

言葉、写真、音など、その知に適した形で外へ出す。

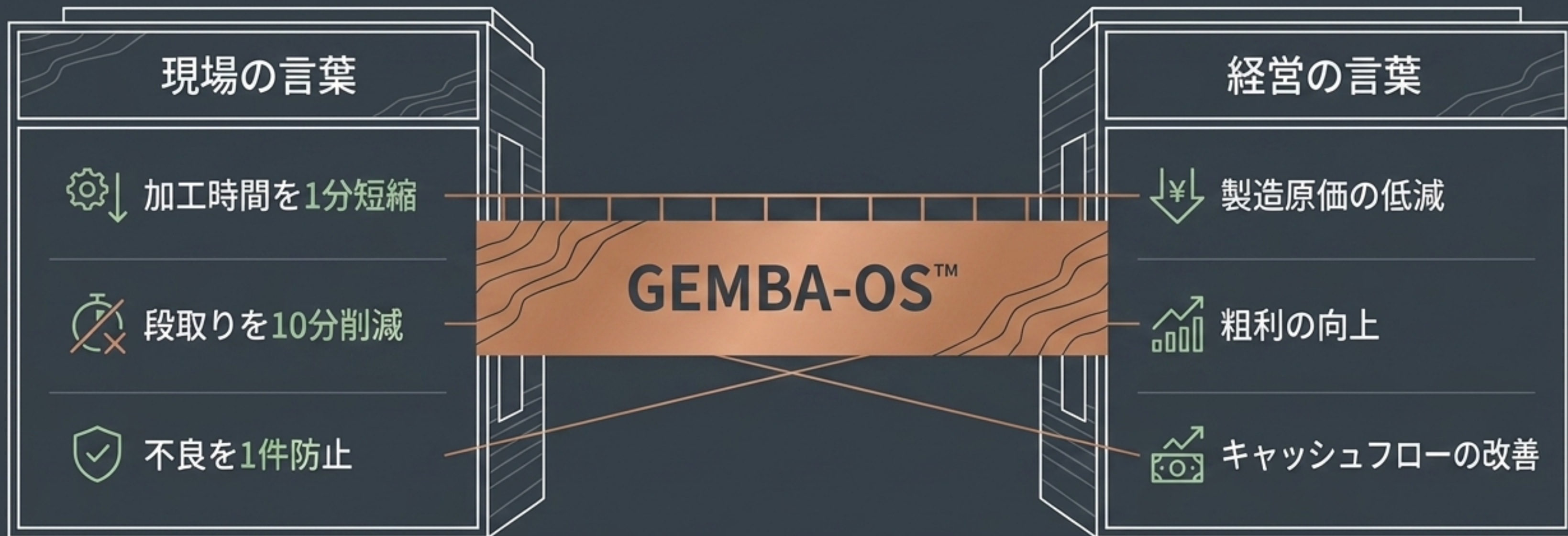


AIの得意領域と、現場の「泥臭い現実」のギャップ



AIは無意識の翻訳ルールを持ちません。「AIをどう導入するか」ではなく、「現場の当たり前と経営の数字を、どう関係づけるか」が問われています。
最後に判断を引き受けるのは人です。

現場の言葉と経営の言葉を「翻訳」する



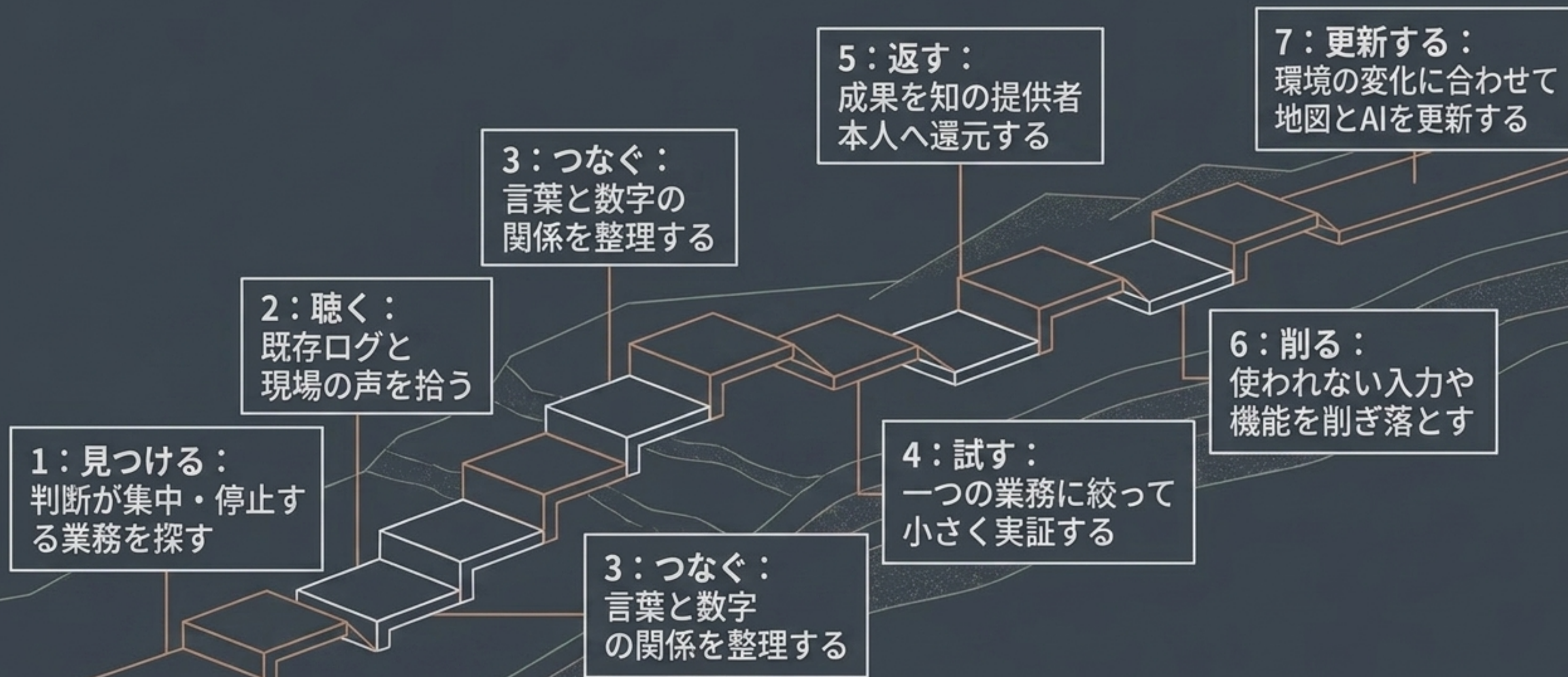
同じ出来事でも、立場によって使う言葉が違います。GEMBA-OS™は、現場の改善が会社全体や顧客にどんな価値を生み出したのかを翻訳し、誰の工夫がどの利益に結びついているかを見える化します。

一つの見積もりに、会社の全遺伝子が宿る

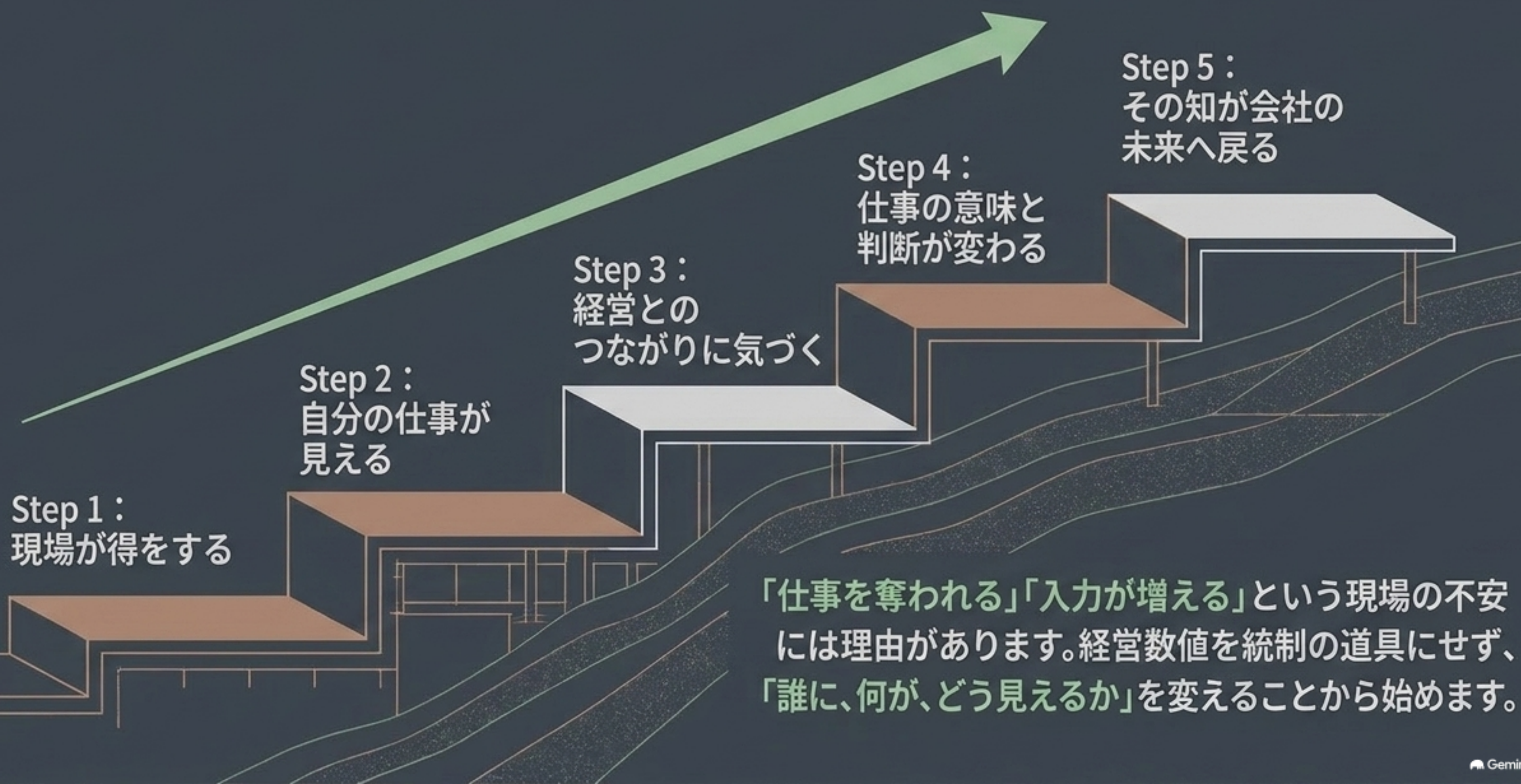


見積もりは材料と加工費の単純な計算ではありません。熟練者の脳内で行われている高度な「圧縮」を紐解き、次世代へ引き継げる状態を作ります。

会社を止めず、小さく試して育てる7つの歩み



現場の反発を力に変える「馴染ませる」原則



どの「結び目」から紐解くべきか



見積もり・ 値付け判断

社長やベテランに依存する
価格決定の整理



原価・利益構造 の翻訳

工数からキャッシュフロー
までの繋がりを可視化



現場改善の価値化

段取り短縮や不良削減の
経済価値への変換



不具合・異常対応

過去の兆候、原因、判断
の繋がりを資産化



顧客別例外対応

担当者の頭にある暗黙
の了解や条件の整理



熟練技能の継承

手順だけでなく、音、匂い、
止め時の感覚を残す

診断から実証へ、リスクを抑えた導入ステップ

Phase 1: 現場知チェック & 対話（無料）

どこを見るべきかの入口を見つけ、既存ログから仮説を立てる。（30～60分）

Phase 2: 現場知ドック

観察とヒアリングを通じ、属人化マップと実証案を作成。（約4週間）

Phase 3: 小規模実証

一つの業務に限定し、知識構造化とAI活用を試す。（約2～3ヶ月）

Phase 4: 本導入・継続運用

成果をもとに対象範囲を広げ個別設計。

なぜenmonoが、現場の知とAIを繋げるのか



創業以来、ものづくりの現場で「何のために事業を続けるのか」「自社の中に何が眠っているのか」という深い判断の根（肚）を探ってきました。

AIが肚を代替することはできません。
すでにそこにあるが形になっていないものを、
対話と実践によって立ち上げる。
それが私たちの一貫した仕事です。

まずは、ひとつの業務を見つめ直すことから



いきなり全社導入の話はしません。

「社長しか判断できない仕事」「ベテランが休むと止まる仕事」を一つだけ教えてください。
その業務のどこに現場知が埋まり、会社が何を大切にしてきたのかを、一緒に眺めるところから始めます。

現場の判断と、経営の数字をつなぐ。現場を持つから、AIが面白い。